

「景色」の内と外 --- 三輪洗旗の平面作品について

三輪洗旗がここ数年取り組んでいる、一辺 14cm ほどのちいさな画面に、私などは容易く引き寄せられてしまう。これらの平面作品について、作家はいずれも「景色」に由来するという。

高速道路で車を走らせ、移り住んだ町を歩き、画廊と最寄駅を往復し、少しばかり遠くへ旅をする…そんな日常のなかで作家が目にした「景色」。そこには地元群馬の山々と思しきものが見えたり、カーブを描く海岸線のようなかたちがあらわれたりもする。ただ、それらはあるがままの外界ではなく、さりとして人の内側に渦巻く主観的な幻想でもない。どちらからも一定の距離をおいた場所。作家の立ち位置はそんなところにあるのだろう。

三輪の制作と展示は、かたちの簡略化や置き換えによって、そこに有るモノの内包する意味や、そこから立ち現れるイメージをかすかにずらすことに主眼が置かれてきたように思える。そこに生まれた「ずれ」は、言い換えれば五感で知り得る世界と、その向こう側にある未知なる世界との境界にできたちいさな裂け目のようなものだ。見えそうで見えない彼方に向って、私たちは必死に目を凝らし、何かしらを探ろうとする。そこに作家の意図があるとすれば、やはり境界こそが彼の居場所であり、制作の重心なのではないか。

「景色」の内と外との境界を慎重に歩みながら、筆をちいさな合板パネルの上へすべらせ、細密な加工を施す。そうしてつくられた平面作品は、それ自体が世界を隔てる膜であり、向こう側に続くわずかな裂け目が、何処かに必ず準備されているはずだ。

そんな妄想を楽しみながら、もやもやと作品を眺めてみる。画面と自分とのあいだに幾つかの附合がありそうだと気づく。パチンと見事に収まるのではない。丁度ジグソーパズルの最初のひと組が嵌るとか、街角で聞こえてくる他人の会話がふと腑に落ちるとか、そういう類のささやかな附合というほうが適当だろうか。

芸術表現に感じ入るということは、そんな附合の集積であるように、私などは思う。激情や衝撃に揺さぶられなくとも、人はささやかに生き、何かしらを表現する。その純度を上げ形を成してあらわされるのが芸術だとするならば、三輪の制作はまことに地道に、確かに歩みをすすめているといえるだろう。

そして、いま私が感じる作品とのささやかな附合は、私の中にひっそりと在る、まだ見ぬ「内」へと続く裂け目との重なりなのかもしれない。

伊藤佳之／福沢一郎記念館（世田谷）非常勤嘱託、学芸員